

5 性指導について考える

1 はじめに

昨年度、これまで、その必要性は認めつつも、仲々取り上げられることのなかった性指導について、初めてグループを作って考えることになった。

まず、学校生活や家庭生活の中で見聞する子どもたちの性感情や行動について、しっかりと受けとめることから出発し、その指導について考え、実践をすすめてきた。そして、これまでの本校の性指導をまとめるかたちでの第一報を送りだすことができたわけである。その中で、私たちが感じたり、確認したりしたことをランダムにあげると次の通りである。

- 性教育は、男の子あるいは女の子として生れ、死ぬまで自分の性をみつめて生きること、そして、その中で男女の協力、いたわりあい、命の尊さなどを学ぶ、まさに性は生 生きることの教育、人間教育であるということ。
- 教えるべきことは、きちんと教えるという姿勢をもつこと。子どもたちの真剣な問いかけには、決して逃げることなく事実、真実を語り、子どもの悩み、不安に相談にのれる教師でありたいこと。
- 性指導に限ったことではないが、とりわけこの分野では、より一層家庭との連絡、協力が必要であるということ。
- 性の自立は、時間を要する学習とトレーニングである。したがって、小学部から高等部まで、障害の軽重を問わず、年齢相応・発達に応じた指導とその子なりの自立があるということ。
- 在校生を見つめ、その指導のために、卒業生や年長者の性感情や行動を親や施設指導員の人たちと話し合う研修の場をひろげたいこと。

そして、今年度は、次の2点を柱として研究をすすめることにした。

(1) 性指導の学習実践を重ねること

教えるべきことは教えるという姿勢がもてない、あるいは性指導に自信がないと消極的であるならば、どんな立派な教育課程や指導計画があっても、それは絵に書いた餅といえよう。この指導では、教師一人ひとりの性意識が問われ、意欲的、積極的な取り組みが要求されているといえよう。その意味で、あたり前のことであるが、豊かな実践をしていかなければならないと考える。とはいえ、我々自身も性指導を受けた経験に乏しく、しかも性指導には尻ごみしたり、敬遠したくなる一面があることも事実である。そのためにも、「こんな風にすればよいのだ」「こんなやり方もある」「こんな指導も性指導なのだ」といった具体的な実践を数多く積み重ねていくことが、まず必要なのである。そして、この実践は、日常生活指導、教科、特別活動といったあらゆる教育活動の中味を性指導というフィルターで見つめ直す作業ともいえるようである。

(2) 家庭との連絡 協力を深めること

養護学校教育では、常に家庭との連絡、協力が大事とされてきているが、性指導の分野では、とりわけ重要といえよう。

昨年度、高等部での「生殖のしくみ」の学習を行ったおり、家へ帰って子どもが生殖器名を口にだした時には、突然のことでドキッとしたこと。そして「私にも赤ちゃんできる？」と聞かれ、もう一度びっくりしたという連絡をもらったことがある。また、排泄指導や自慰行為などの指導においては、家庭によってはそれなりの考え方をもっている場合も予想され、慎重にそしてお互いに理解しあいながらすすめていくことが大切となる。その意味で、本年は親との学習会を積極的にすすめることにした。

(浦 田 東 作)

2 学習実践から

(1) ぼくのこと・わたしのことを知ろう(中学部 1 年)

中学生時代は思春期の真っ直中、心も身体も大きく成長し、特に異性への関心が強くなる時期である。障害のある子どもたちであってもそれは例外ではない。性というとなんだか生々しいもの・扱いにくいものとしてとらえられがちであるが、誰もがやっている、ごくあたりまえの日常的な授業の中で取り組むことはできないだろうか。性を前面に押し出すのではなく、指導者が、ほんの少し性を意識することによって、もっと日常的に性と付き合うことができるのではないだろうか。このような思いで取り組んだのがこの『ぼくのこと・わたしのことを知ろう』である。

このクラスは、男子5名、女子2名の7名で構成され、うち3名は他校からの入学である。言語によるコミュニケーションが難しい生徒もいるが、それぞれに自分の意思を持ちそれを表現することができる。現在では、友だち同士のかかわりが拡がり、クラス意識も育ってきているが、4月当初は、一人遊びや友だちへの一方的なかかわり方が見られた。そこで、友だち同士(担任も含めて)お互いに知り合うことで、友だち関係やクラス意識を育てたい。また、自分自身を知ること、思春期に入りつつあるこの時期を健やかに乗り切りたい、と考えた。

① 小さいときのことを知ろう

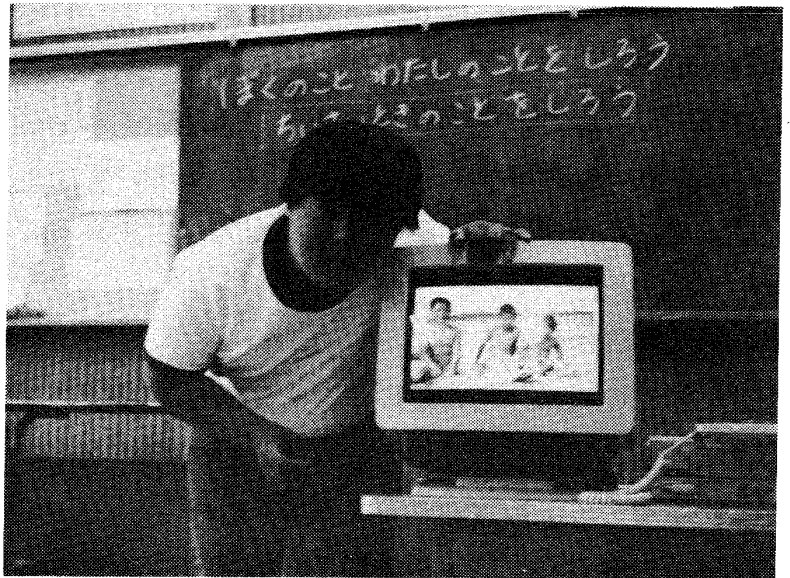
まずは、自分たちにも赤ちゃんのときがあったこと、家族の愛情につつまれて育ってきたことに気づいてもらいたい、と考えて授業に取り組んだ。

そこで、赤ちゃんのときを実際に感じてもらうため、新生児大の赤ちゃん人形(身長50cm、体重3,000g)を登場させ、子どもたち一人ひとりに抱かせ、感想を聞いてみた。「これは赤ちゃんなんだ」という意識のためか、みんな緊張して抱いている。ほとんどの子の第一声は、「重い」だった。そのあとに「かわいい」がつづいた。

「背くらべしたい」とY子。赤ちゃん人形はY子の膝ぐらいまでしかなくて、子どもた

ちは、「へー」とびっくり。優しい表情でおっぱいを飲ませるまねをしているA子。顔をくしゃくしゃにして笑って抱いたO男。「重い」といってすぐ返したS男。「ぼく、いつもおかあさんにこうしてもらってん」とおんぶしてみせるM男、なぜか抱くのを嫌がったT男。「かわいい」と嬉しそうに抱いたN男。その子なりに“赤ちゃん”を感じているようだった。

このあと、それぞれが持ってきた小さいときの写真やエピソードをもとに、一人ずつ発表を行った。写真では小さいのでパソコンを使って画面上に表示した。画面に写真が現れるたびに子どもたちから「かわいい」などの歓声があがり、みんなに見てもらえるのが嬉しくてたまらない子、話がしたくてたまらない子、恥ずかしくてなかな



なかな声が出ない子など、反応は様々であったが、どの子も飽きることなく、自由に、積極的に活動することができた。また、自分のことだけでなく、友だちの話にとっても興味を示した。そのとき、どの子の話の中にも必ず登場するのは家族のことであった。一緒に写真に写っているお兄ちゃん・お姉ちゃん、写真を撮ってくれたお父さん・お母さん。子どもたちに対する家族の人たちの暖かい愛情と、それをしっかり受けとめて育てている子どもたちの姿を、はっきりと感ずることができた。

② 家族のことを知ろう

家族に大切にされ、その愛を充分に感じて育ってきている子どもたち。しかし、それが当たり前になりすぎていないだろうか。そのために、愛することが非常に下手で、自分の思いを一方向的に相手にぶつけるだけの思いやりのないものになりがちとなっているのではないだろうか。しだいに思春期に入り、他人を、異性を意識しはじめている彼らを見ていると、もっと上手に人と付き合っていけるようになってほしい、“愛する”ことを意識してほしい、と思わずにはいられない。

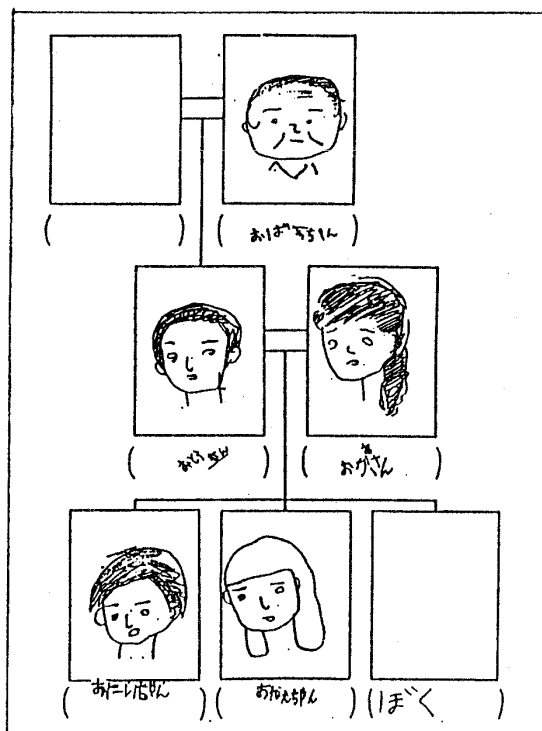
そこで、最も身近な存在である家族を取り上げることにした。ここでは、家族への愛情を意識することとあわせて、血のつながり、受け継がれてきた命であることを感じてほしい、また、いろいろな家族があることを知ってほしい、と考えた。

まず、それぞれに家族の絵を描いてくるという宿題を出した。このことで、子どもたちは家族への思いを充分に意識できたのではないかと思う。私自身も家族の絵を描いたのだが、照れくさくてたまらなかった。描かれている家族の側にも同じような照れが感じられ

て、思いがけず、自分自身の家族への愛情をも意識する結果となった。

その絵をもとに、簡単な家系図を作った。お父さん・お母さんがいるからぼく・わたしがいるきょうだいがいる。お父さん・お母さんにもお父さん・お母さんがいる、きょうだいがいる……というふうに、たくさんの人とつながって生きているんだ、ということを感じてほしい。できれば何年後、何十年後の自分の家族についてへも思いを広げて行ってやりたいと願っている。また、きょうだいの数や構成の違い、おばあちゃんのいる家・いない家、お母さんがいないO君の家、自分自身がお父さんであるK教諭の家など、いろいろな家族構成を知ることによって、視野を拓け、人間関係を拓けて行ってやれたらと思っている。

どの子も家族のことを話すときは、とても嬉しそうだった。家系図作りにとっても興味を示したT男。家系図の中に自分の絵も描き加えたY子。いとこの家にいるおじいちゃん・おばあちゃんのこと



T男の家系図

話したかったS男など。家族については、これからも折に触れて話題にしていきたいと思っている。

③ ぼくのこと・わたしのことを知ろう

これまで、小さいときや家族のことを通してぼく・わたしについて考えてきたが、次回は、ストレートに“今”のぼく・わたしに迫ってみたいと考えている。人を愛する心、思いやる心は、人に愛されてきた経験と、自分自身を知ることによって育っていくのではないだろうか。家族をはじめ、友だちなどからメッセージをもらい、自分自身を客観的に見る目を育てたい。また、自分のまわりには、いろいろな人がいて、それぞれにいろいろな思いをもって生きていることに気づいてほしいと思っている。どのような展開になるか、子どもたちがどんな反応を示すか、楽しみである。

これらの学習にあたり、家庭での協力が快く得られたことに、とても感謝している。学習中や学校での子どもたちの表情は、学級通信を通して家庭へ伝えてきた。

中学生時代は、友だちを意識し、仲間をつくっていく時期である。家庭や学校といった限られた中だけでなく、社会へも目を向けてほしい。家族に大切にされてきたことをベースに、愛されるだけでなく、家族を思いやり、さらに、まわりの人たちを愛することで生きていける人間であってほしいと願っている。こういうのも、性の指導の一つではないだろうか。

(松村佳恵)

(2) 紙芝居をつかったの授業(中学部)

中学部段階になると第二性徴があらわれ、自分自身のからだに関心をもったり、異性のからだに興味をもつということが学校生活の中においても日常的にみうけられる。たとえば自閉傾向をもつ中学部3年生のA男。関心のあることが言葉としてたてつづけにできるタイプの男子生徒であるが、性毛のこと、異性の胸のふくらみのことで話しかけてくることが多い。また「女の人におへそあるか?」といったこともよくきかれる。A男ほど言葉にでないまでも多くの生徒がさまざまな場面でこういった言葉を口にしてしていることからその関心の程がうかがわれる。このような興味・関心をうけとめながらも、からだそのもの、なかんずく第二性徴のあらわれてきている男女のからだということについて正しい理解をもたせたいという思いから担当している理科の中で「からだについてしろろ」という単元を設定し指導を試みることにした。指導計画は次の通りである。

第一次	からだの名まえ……………	2時
第二次	目、耳、口、鼻のはたらき……………	2時
第三次	手足のはたらき……………	1時
第四次	たべもののおりみち……………	3時
第五次	おへそのひみつ……………	2時

この計画のなかで「おへそのひみつ」は身近なへそをとおして生命の誕生にまでせまったものである。しかし、指導を試みるとなると、自閉傾向の生徒が学習グループの中で半数以上いることもあって集中させるとなると工夫を必要とする。これまでもイメージ化しにくい内容を扱う時には終芝居を用いて指導にあたったことを想起し、この方法を取り入れることにした。紙芝居「おへそのひみつ、は以前に高等部で指導した「憲法のはなし」につづく、第2作目となる。そこで紙芝居を活用しておこなった授業の実際を示すことにしたい。

まず導入部分においては人体模型を使ってからだの部分の名まえを確かめることにした。人体模型に布をかぶせたままであるが前に提示すると「こわい!」「いやだ。」という声が多くきかれ、さらに布をとりあげると一層大きな声となり机の下にもぐりこむ生徒もみられた。指示棒でこれまでに学習したことがらを中心にからだの部分を示してこたえさせたあと「さあ、今日はこのうちの1つについて勉強するよ。」という、それぞれに思い思いの発言が多くみられた。なかには、ややはにかみながら「ちょっと言いにくいけれど、ペニス?」と答えた女生徒もいた。性器の名まえについてもからだの大事な一部なので正しく覚えようということと、所かまわず言わないということを約束していたが、学習の場で真剣な顔つきで答えた生徒をみるにつけ普段からのかかわりの大切さを感じとることができた。このようなやりとりの中から、おなかのあたりを限定したところ「おへそ」の答えがかえってきた。ここでいよいよ紙芝居の活用である。

紙芝居の内容そのものは資料にあるとおりであるが、紙芝居をおこなっていくなかでの様子をスケッチ風にのべることにしたい(まるでかこった数字は紙芝居のナンバーを示す資料参照)。

②のところでは「にわとりはおへそがありません。」というところで「あたりまえでしょ。動物なんだから。」とM子。人間にはへそがあってほかの動物にはへそがないという認識だったようである。紙芝居のなかでたまごからうまれる動物というところをおさえて、にわとり以外に答えさせると、すずめ、かえる、へび、わに、いるか、うぐいす、がちょう等たくさんかえてきた。いるかについて若干の説明を加えた後、海にいる動物ということで魚のなかまについてきいたが案外発言はみられなかった。いるかのところの説明が適切でなく混乱がみられたのかもしれない。そこ

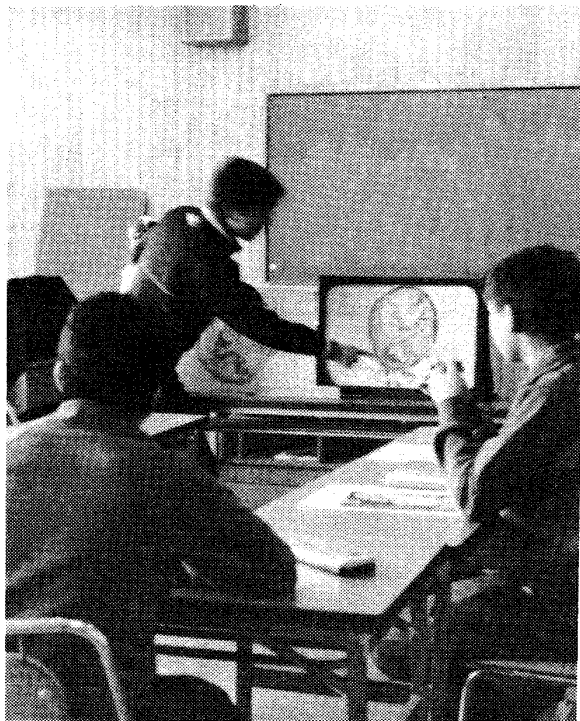
で、食卓によくでてくるいくら、たら子、かずの子等のヒントを与えた。ここで動物だからへそがないという認識だったM子もたまごからうまれる動物にはへそがないということが明確になったようである。

次に④のところでは「赤ちゃんになってからうまれてくる動物は？」という問いかけには馬、豚、犬、猫、うさぎ等があり、妊娠中の教師の名まえもいっしょにあがってきた。

⑥と⑦のところでは赤ちゃんがひっくりかえていたのがふしぎだったようで「あれ…」「ひっくりかえてる。どうやってひっくりかえるの?」「なぜ?」といった言葉が口々にだされた。紙芝居をつくっている時それほどにも気をとめなかったのであるが、生徒の疑問に接すると指導者自身考えさせられる思いであった。

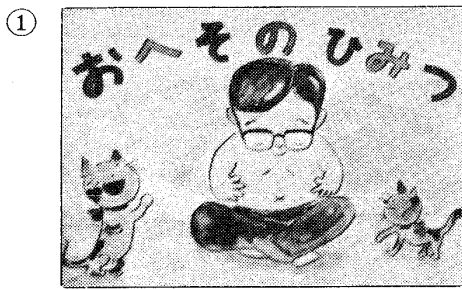
⑧のところでお母さんが苦しむところになると「こわい!」とそれまで発言の少なかったM男。出産の大変さを実感したようである。それにつられて、S男が「赤ちゃんうむの女の人だけか?」とたしかめるように問いかけてきた。

このように紙芝居を使っての学習は生徒の発言を多くひき出すことができるし、何よりも学習そのものに集中力がみられた点はおおいに評価することができる。遠くをぼんやりながめたり、全く関係のない言葉をくり返したりということは全くといってよい程みられず、やはり紙芝居そのもののもつ効力を感じさせられた。



紙芝居を使っての授業

<資料> 紙芝居「おへそのひみつ」

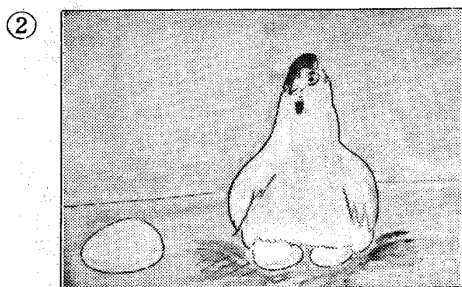


「おへそのごまをとるとおなかいなくなるか?」といっている人はいませんか? そうです。おへそをいじったり、ひやしたりしないように、だいじにしなければなりませんね。

「ぼくには、おへそがないよ。」という人はいませんか? 人には、かならずおへそがあります。

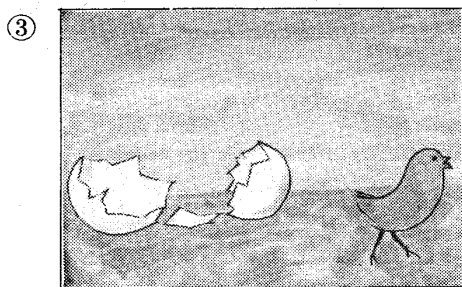
「わたしには、おへそが2つあるわ。」という人はいませんか? それは、おへそでなくて、おっばいです。

みなさんのからだにかならず、あるおへそはいったいどうしてできたのでしょうか。さあ、それではおへそのひみつをさぐってみましょう。



みなさんは、にわとりを知っていますか?

にわとりのおかあさんは、まるいたまごをうみます。そのたまごをあたためると――



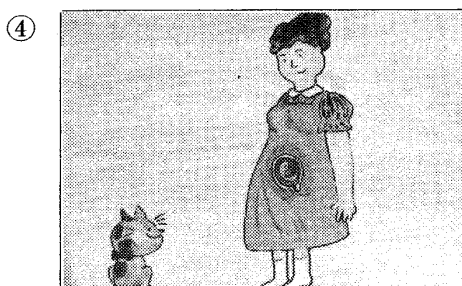
なかから、ひよこがうまれます。ひよこはしばらくたつと、大きくなって、にわとりになります。

にわとりには、おへそがありません。

たまごをうむ生きものには、ほかに、どんなものがあるでしょう? (いろいろこたえさせる)

そうですね。そのおかあさんのうんだ、たまごから小さな赤ちゃんがでてくる生きものはみんなおへそがありません。

ところが――



人間はちがいます。人間のおかあさんは、にわとりのような大きなたまごをうみません。

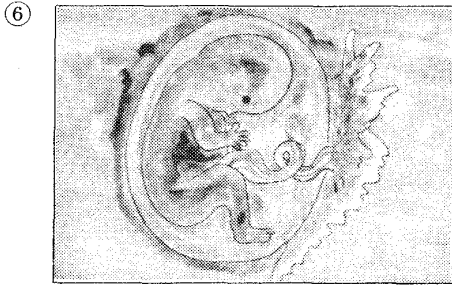
おかあさんのおなかのなかで、とても小さいけれど、ちゃんと人のかたちになってから、うまれてくるのです。

人間だけではありません。いぬ、さる、くま、なども赤ちゃんになってからうまれてきます。

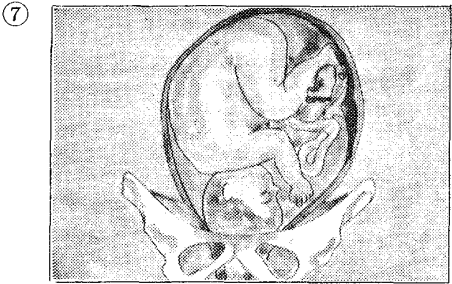


おかあさんからうまれた赤ちゃんは、ないたり、おっばいののんだり、空気をすったりすることができます。

けれど、まだおかあさんのおなかにいる時は、とてもよわくて、とても小さいので、おっばいものめません。空気をすうこともできません。



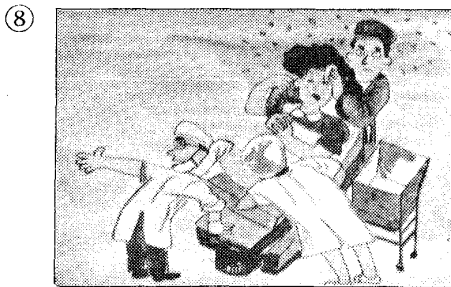
それで、おかあさんから、おっばいのかわりになる、えいようや、だいじなものをおかあさんのえいようタンクから、ほそいくだをとおして、おくってもらいます。そして、いらなくなったものをタンクにおくりかえします。このほそい、くだのことをへそのお、といいます。



おなかの中の赤ちゃんも、おかあさんの、おなかの中で、たくさんすごしたので、すっかり大きくなって、はやく外にでたがっています。

赤ちゃんはおかあさんのおなかの中で、さかんに足をふんばったり、うでをうごかしたりしています。

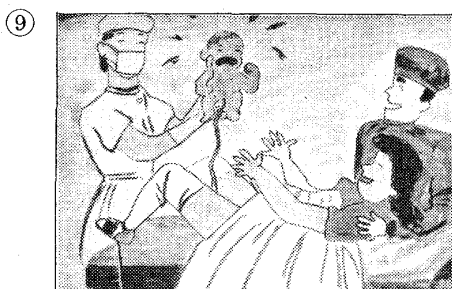
赤ちゃんは、でんぐりかえしをして、あたまがおかあさんのこしのほねの中にはいっていきます。



いよいよまれる日、おかあさんのこしやおなかが、とてもいたみます。おかあさんとても、くるしそうです。

でもがんばっています。もちろん、赤ちゃんもがんばっているのですよ。おかあさんのからだから、あせがふきだしています。

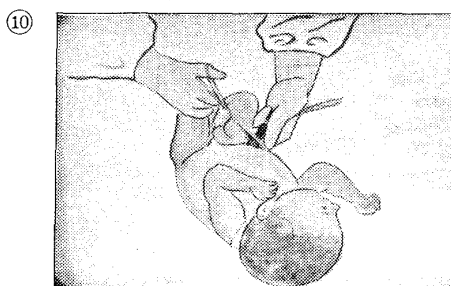
このように、おかあさんは力いっぱいがんばって、あなたをうんだのですよ。



赤ちゃんのあたまがみえはじめました。助産婦さんが手をそえて、あたまがでてくるのをてつだいます。

「おぎゃあ！」

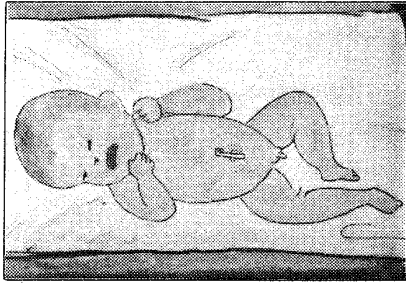
赤ちゃんの元気なうぶ声がへやいっぱいひびきわたりました。はらはらしていたおとうさんは思わずバンザイをしました。うれしくてことばなんかでてきません。おとうさんの目には、なみだがひかっていたいました。



うまれたばかりの赤ちゃんには、へそのおが、ついたままになっています。助産婦さんが少しのこしてプチンと切りました。それは赤ちゃんが自分で空気をすったり、おっばいをのんだりすることができるようになったからです。

そして2・3日たつと、かわいてポロッと、とれてしまいます。そのとれたあとが――

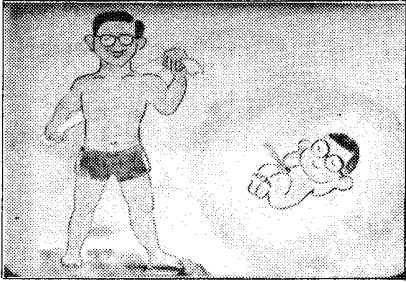
⑪



あなたの、おへそです。

そうです。おへそは、おかあさんから、えいようや、だいじなものを、おくってもらっていたしるしなのです。

⑫



おとうさんにも、おへそがあります。おとうさんも、ずーっと、むかしは赤ちゃんで、おとうさんをうんだおかあさんのおなかの中にいたから、おへそがあるのです。

おかあさんにだって、おへそがあります、もちろん先生にもあります。さあ、これでどうして、おへそがあるか、そのわけがわかりましたね。おへそはあなたがうまれてくるのに、たいせつなところだったのです。だから、おへそのごまをとるようなことをしないで、たいせつにしましょうね。

それでは「おへそのひみつ」の紙芝居はこれでおしまい。

※「おへそのひみつ」を紙芝居をつくるにあたっては次の絵本を参考にした。

○かこさとしの本1「あなたのおへそ」

かこさとし著 童心社

○こころ からだ いのちのえほん 4「あかちゃんはどこからきたの」

北沢 杏子著 岩崎書店

○こころ からだ いのちのえほん 7「あなたがうまれるまで」

北沢 杏子著 岩崎書店

※紙芝居の大きさは市販のものよりやや大きめで、たて38.5cm、よこ55.5cmにしてある。見やすさということが大きな理由である。

(安田茂章)

3 家庭とのかかわり

子どもたちには学校の生活があり家庭の生活があり社会の生活がある。とりわけ、学校と家庭は共に考え理解しあわなければならない。家庭の役割 学校の役割は何か、保護者は性をどのように見ているのだろうか、家庭での子どもたちの性表情はどうだろうか、子ども達の性をどのように受けとめ性の自立を高めていくのか、家庭とのかかわりの中でどのようにすすめていけばよいのか親との学習会の中からここに報告する。

(1) 性の学習会（その1）9月26日（火）7：00～9：00

すずかけ学級（PTA家庭教育学級）の呼び掛けで父親・母親多数の参加があった。顔見知りの母親や初めて見掛ける父親から自己紹介として一言尋ねたが、子どもたちの性に深く関心を抱いていること、「妻に言われて出てきました。」と言う卒直な感想の中にも我が子の性の芽生えをそっと見守り、子どもの表情をだまってもよく見ているのだなと心温かく感じたのである。

産婦人科の医師から、スライドを見ながら次のような話を聞いた。

子どもたちの身の自立は性の自立につながることを、①おしっこを飛ばしっこをする ②おしっこをする時包皮をむいてする ③お風呂で包皮をむいて洗うなど、もっと早い赤ちゃんのオムツ交換や入浴時からペニスの包皮をむいてきれいにしてあげることである。これは包茎予防でもあり自慰行為にもすんなり入れる。「触っていけない」と、特別のことのようにタブー視してしまうと問題になる。問題なのは自慰行為それ自体ではない。それが不適切な時や場所で行われることである。思春期・青年期は特に触らずにはおれない男にも女にも当然の行為である、マナーを教えよう。といった具体的な指導講話を聞き、男性・女性の性を知り相手の性を理解しあうこと、性の指導は性に芽ばえる思春期から始めるのではなく、赤ちゃんのオムツ交換の時から意識していかなければならないことなどを学習した。

この学習会を通して自分達が体験してきたこと、つかみ取ってきたものを思いおこしながら我が子の性の成長に視点をあてられたであろう。子どもたちの日常生活の援助はどちらかといえば母親であるが父親も共に性指導に参加することは、子どもたちの成長を知ろうえで大切である。また、子ども達に仲間体験をさせ相手を意識し人とのかかわりがもてるように触れ合いの場をつくっていくことなど家庭と共に考えていかなければならない。

(2) 性の学習会（その2）11月2日（木）7：00～9：00

ストーブを囲んだ小人数の参加で、来室者から話題の中に入っていくといった気軽な会であった。小人数でとても話しやすかったという感想である。

話題に出たことは、家庭での子どもの性の表情としてトイレマナーのこと、生理のこと、週間雑誌（裸体の絵）のこと、自慰行為のこと、入浴のこと、テレビドラマのこと、すね毛やひげのこと、学校での授業のようすや子ども達の反応として「女の人の体はどうなっ

ているんや」とたずねてくる生徒の疑問に授業を通して答えること、年ごろになったら、おしゃれ心を持つことや人としてのマナーから老人の性と幅ひろい内容であった。

この学習会を通して、母親自身が自分の性のことを話すと言うほど性をオープンにすることはできなかったが、性はプライベートな性質のものであっても学校や家庭でのいろいろなとまどいの感情について話し合いの場を持ち、子ども達の性の成長や表情を理解し合うことは大切なことであるということを確認め合うことができた。

(3) 性の学習会(その3)12月12日(火) 3:15~4:30

表現会でいつもと違った衣装を身につけることで子どもたちの表情が生き生きしてくることや、高等部の女子生徒がレオタードをつけるとやはり大人なんだと意識させられる。その年齢に応じたようにおしゃれをさせてほしいし、子どもたち自身もおしゃれ感覚を意識して生きていってほしいものである。このような話し合いから母親達はどのように日頃感じているのだろうかということで少し角度を変えて学習会を計画したのである。こちらの予想に反して男の子の母親が多かったが、男の子のおしゃれ感覚として、身だしなみのことが話題にあがった。

- 家に帰ると私服になるが何を着たらよいかわからない。季節感がとれない。
- 不快感があると着替えるが、かっこいいとか悪いとかでなく心地良い悪いで決めている。あんまり突飛なことをしていると、かえって目立つので、この頃の高校生がどんなかっこうをしているか興味をもって見ているようにしている。
- おふろあがりに、父親がドライヤーで整髪している。習慣的に「ブーンする」とドライヤーを持ってくる。
- ひげそりが十分にできない。ひげが残るが鏡を見て出来ない。
- 清潔さはいつ、どこへ行っても大事なことである。この年齢になったら清潔をわきまえながら身だしなみは大切である。
- 周りの父や母が意識して身だしなみをする。本人は気づくことがないので働きかけよう。
- 着るもので、自己表現している。服装によってその人の雰囲気わかる。
- たまに、出掛けようとする、「ぼくは何着ていくんや」と意識している。
- 日曜日に母親がパジャマを着ていたりすると、着替えてほしいという。お母さんはこうあってほしいと言う気持ちが見られる。
- 母親がスカートをはいていると落ち着くようだ。
- スカートをはいていると男の子はそばに寄ってくる。
- 何処へ行く時も、何をやる時もいっしょというのではなく、その時の服装を。
- 子どもに選ばせると原色を選ぶ、流行のものを着せてやりたいと思うが、襟の大きいダボッとしたのは着こなせない。

- 新しい物を着ると鏡の前に立って見ている。「かっこいいよ」って言っている。
- だらしなく、しっぽでているよ、おかしいよ。と意識させている。かわいいかっこうをすると喜ぶ。この子もかわいいねと言われたいんですね。
- いつもと違う自分がうれしいよう。“夏まつり”と言うとゆかたを持ってくる。
- おふろに入れなかった時「はげになる(ふけのこと)」と、入りたいことを意思表示する。
- Gパンは、チャックがあるので、ずっとはかせなかった。中学生になってはかせたらとても喜んだ。
- 出来ないからこれでよいのではなく、自分でこうしたいんだっていう気持ち、心が出せるようにすることを大事にする。「お願いします」「ありがとう」と言えることも自立じゃないか。
- 着ることも生きることも表現である、その子の持っている表現、美しいものを美しいと感じる心を小さい時から大事にして育てたい。
- トレパン・トレシャツで登校することもあるが、大きい子が大きな名前を付けて出かけることについて考えてほしい。
- 兼友親子のつどい(卒業生の会)で年一回ホテルなどの会場で立食パーティを開いているがそれぞれにおしゃれをして来ている。場を作ることによっておしゃれ意識を持つ。
- ふだんでない生活がある、おしゃれを試してみたい気持ち装うことや着ることは、広い意味での文化である。

“着るおしゃれ”に話題が集中したが、食べるおしゃれ、見るおしゃれ、聴くおしゃれなどと生活に広がり求めて考えることも楽しいものである。



(卒業生の親子のつどい)

「心を大事にして、豊かな学校生活を送らせてほしい。さまざまな思い出を引き出している運動会や表現会などを通して思い出作り、思い出を12年間の間に増やしてやる。友達を意識する、小さい学校なので何処へいっても話せなくても通じ合うものがある。」と語っていた母親の気持ちを大切にしていきたいものである。

これまでふれてきたように、学校サイドから家庭へ働きかけるといった認識で学習会を進めてきたが、母親達が話される我が子の性の視点、意識に教えられることが多かった。

性指導を受けた経験が乏しいとか、恥ずかしがったりしないで話し合いの場を持ち、語りあっていくことが大切である。これからも家庭と共に性の学習会を計画していきたい。

お互いに語り合うこと知り合うことを通して、子どもたちの性表情をしっかりとみつめることができれば、子どもたちと共に歩む生活は豊かであろう。

4 おわりに

男の子は男として女の子は女として、男性女性としてどう生きていくのか。男と女がいる人間社会、性を持って生きているのだから性教育を考える。子どもたちにも性の成長があり悩みがあるから、つまづかないように、性の問題行動をおこさないように性の指導を考えよう、あたりまえのことなんだ、性のことをタブー視しないでとりくんできた。

性指導の学習実践の中で確実に子ども達の表情は真剣になり、まわりへの関心が高まり彼らの感性の素晴らしさに触れることが出来る。授業の進めて行く中でも指導者自身、緊張感を持ちながら、子どもの生き生きした手ごたえをつかみ得たゆとりすら感じるのである。子どもたちの卒直な表情は、知り得た喜びをすぐ出してくるのである。

性指導の柱をどこにおくか、系統性は、組織的位置づけはどうかといったカリキュラムに関する研究は残された課題であるが、指導者がほんの少し「性」を意識することによって、もっと日常的に「性」とつきあうことが出来るのではないだろうか。こんな思いでとりくんできた学習、また日頃の生徒の関心を手作りの紙芝居にして子どもの反応をみながら、性の学習を進めてきた。このような学習実践の広がりを積み重ねながら、子どもたちの成長を見つめていきたい。

性の学習会を通して、父母の思いや子どもたちの性感情や行動など教えられることが多々あり、家庭との協力・連携の大切さを再認識している。

学校生活での経験だけでは性教育に限界がある。子どもたちはそれぞれの家庭で生活し地域社会に住んでいる。周りからの影響力を受け、その時その時の体験をとおして生きている。学校を卒業し親と離れて地域社会の生活圏で生活することを第一に考え、子どもたちが自分のまわりの人に対してよりよく自己主張できるようにはぐくんでいきたい。

学校や家庭が特設する性の指導や日常のふれ合いの中で機会をとらえて、その時、その時に学習していくもの、それは性の指導や問題行動の防止に終わらず人と人とのかかわりを豊かにし生活を高めるためのものである。もっと開かれた性の指導を目標としたい。

家庭とのかかわりの中では、おしゃれ感覚を意識していくことも大切であり、出かける交流の場を設定することも保護者や私たちの課題であろう。今後も男と女を意識してふれ合いの指導を考えたり、家庭との話し合いの場を持ち続けたい。

(花 本 ヨシエ)